



日本取引所グループ
ロンドン駐在員事務所
アンナ・ヒル

—連載（第12回）—

英労働党の党首選挙 ～更なる左傾化は劇薬か、毒薬か～



■ 1. はじめに

英国では、9月12日、保守党と並び二大政党と言われる労働党が党首選挙を実施し、即日その結果を発表した。今回の党首選挙は、5月の総選挙で労働党が26議席を失い、エド・ミリバンド前党首が大敗の責任を取って辞任したことを受けて行われたものである。今回、新たに党首に選出されたのは、強硬左派のジェレミー・コービン氏（66歳）だった。

5月に、党首選に向けた選挙戦が始まった当初、コービン氏が勝利することは党内から党外からも予想されなかった。コービン氏は国会議員として23年間のキャリアを持つベテランだが、その間に内閣に入ったことはなく、独自路線を貫く強硬左派の政治家として認識されてきた。コービン氏の独自性は、ギリシャの反緊縮政党SYRIZAに同意を示したほか、北アイルランドの独立を求めて戦ったアイルランド共和国軍（IRA）を支援したこと

を例にとっても明らかである。

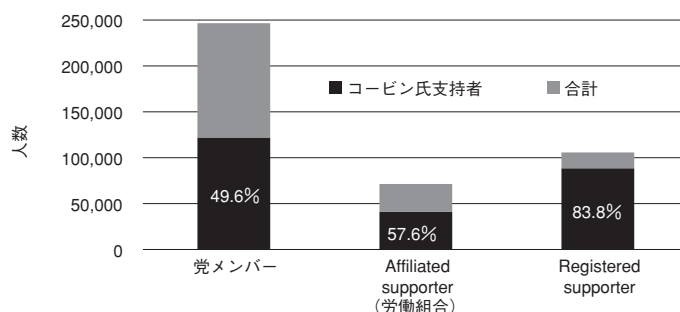
このようなコービン氏だが、今回、一般労働者に受けの良い政策と、型破りな政治家としてのこれまでの歩みが、特に若者から高い評価を受けて当選に至った。評論家の間からは、労働党の今後の分裂や、責任野党としての地位喪失を予想する声が聞かれるようになっている。ここでは、コービン氏が労働党党首となれたのか、その要因及び、労働党のこれからどのような方向に進んでいくのか考察してみたい。

■ 2. 党首選挙の制度

コービン氏は、1回目の投票で59.4%を獲得し、圧倒的な支持を受けて勝利した。コービン氏の、これまでの型破りな政治活動と一般労働者向け政策は、（富裕層の子息が通う）私立学校やオクスフォード・ケンブリッジ大学の卒業生が多い「政治家のエリート層」に反発を覚える若者や一般労働者の支持の受け



(図表1) コービン党首の支持者



(ソース) <http://www.telegraph.co.uk/news/politics/labour/11860439/Labour-leadership-election-How-the-party-voted.html>

皿となった。

コービン氏の大きな勝因は、実は、ミリバンド前党首が導入した選挙のルール改正にあった。ミリバンド氏が党首に就任した当時、有権者は党のメンバー、党の国会議員、労働組合の3種がそれぞれ投票権の3分の1を持っていた。当時、労働党内にあった、労働組合が権力を持ちすぎているとの批判に応え、ミリバンド党首は従来の制度を「完全一人一票制」に改正した。加えて、有権者も拡大し、これまでの労働党メンバー、労働組合のメンバー (Affiliated supporterとして申請した者) に加え、党のメンバーでなくても申請手続きを行えば投票可能な「Registered supporter」の制度も導入した (注1)。

今回の選挙は、新制度に基づく初めてのものであった。その初回において、新選挙制度の特徴が如実に表われた。

まず、図表1、図表2を見ても明らかなように、Registered supporterの存在が選挙結

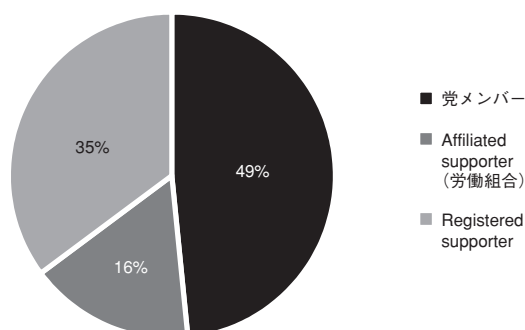
果を左右した。コービン氏は労働党のメンバーからも多くの票数を獲得しているが、Registered supporterの35%が無ければ、勝利には至ることは難しかったろう。もう一つは、国会議員のプレゼンスの低下である。これまで国会議員は、全投票権の3分の1を持っていたが、今回からは61万票の中の232票でしかなくなってしまった。コービン氏の国会議員中の支持率は20%だけとされているが、国会議員による人気の有無は、数字の上ではあまり関係なくなってしまった (注2)。

もう一度、「Registered supporter」の話に戻る。

このシステムは、党のメンバーでなくても登録をすれば投票が可能な制度である。登録申請にあたって3ポンド (約570円) が必要である。7月、コービン氏のリードがメディアで放送されると、コービン氏を更なる支持を目的としたと見られるRegistered supporterの登録者数が増加した。まさに、



(図表 2) コービン氏の得票分析



支持が支持を呼びこむ形式で、労働党の党員でも、支援者でもない数千人がコービン氏への投票を目的として申請した(注3)。ただ、この中には、コービン氏が労働党を混乱させることを期待する「悪意の申請者」も含まれていたという見方もある。客観的な事実としては(注4)、Registered supporter票の10万5,598人のうち、8万8,449人(83.8%)がコービン氏に入れられ、それがコービン氏に入れられた総投票数の35%となった(注5)。このRegistered supporter制度、今後、賛否を巡り、様々な評価がなされるのではなかろうか。

■ 3. 特異な存在

コービン氏は1983年に国会議員になって以来、上述のとおり、ベテラン議員でありながら、その間に内閣に入ったことはなく、独自路線を貫く強硬左派の政治家であった。党の方針に背くことも多々あり、これまでの国会議員としての議会投票のうち、約4分1において、

労働党案に賛同しない行動を取ってきた。このことが、コービン氏を、他の政治家に類を見ない、自分の主義・主張に忠実だというイメージとなりそれが高い評価となった。



©The Mirror

コービン氏はこの選挙まで一般人にほぼ知られていなかったが、左派活動家の世界では長く活動している。大学時から核軍縮キャンペーン(Campaign for Nuclear Disarmament, CND)に参加し、南アフリカのアパルトヘイトに対する抗議で逮捕されたこともある(写真)。また、北アイルランドで英国からの独立を目指すアイルランド共和国軍(IRA)と友好的だった。本年の8月、IRAが英国で行った残虐行為について聞かれ際にも非難しなかった(注6)。このような対応は、今回の党首選においては、他の候補者などから激しく批判を受けることとなった。



次に、コービン氏が揚げた政策を見ていく。コービン氏は、「Standing to deliver」という名称で以下の“10点計画”を発表した^(注7)。

- ① 財政緊縮策の中断
- ② 社会保障への投資
- ③ 気候変動対策
- ④ 鉄道とエネルギー業界の国営化
- ⑤ 不動産市場への介入（住宅価格の統制と住宅建設プログラム）
- ⑥ 英国の核プログラム「Trident」の完全廃止
- ⑦ 国民健康保健サービス（NHS）の完全再民営化
- ⑧ 一般労働者の権利拡充
- ⑨ 国民の平等性徹底、及び移民の受入拡充
- ⑩ 教育改革・大学教育の無料化

反緊縮策、大学無料化及び住宅価格への介入に関する政策は、生活コストの高騰で苦しむ20代と30代の若者にとっては、興味をそそるものである。また、社会保障（NHS制度の改革を含む）についても国民の支持は得られそうである。ただ、評論家は、この10点について実現可能とは見ていない。特にTridentの完全廃止は、本年4月の世論調査で、支持すると回答したのは、イングランド・ウェールズで17%、スコットランドで35%しかなかった^(注8)。コービン氏は、(Tridentの完全廃止の政策などで、自分の政策に多くの支持を集められることを期待して、)スコ

ットランドで“10点計画”を発表したが、その後の世論調査では、Tridentの完全廃止政策は、非現実的という見方が強く、反緊縮政策も、確かに最近の世論の中には反発の声は上がっている多数になっておらず^(注9)、コービン氏の政策が支持を集められるとは言えない状況である。

■ 4. 労働党のこれからの方向性

労働党は、戦後、方針変換を繰り返してきた。当初、文字通り、一般労働者の見方に立った左派の党として設立されたが、英国の経済が、重厚長大の産業を主としなくなってから、労働者以外にも支持者を探し始め、中道左派に軌道修正していった。1979年の総選挙で、保守党のマーガレット・サッチャー女史が首相に就任して、労働党はマイケル・フット氏が党首に選出され、強硬左派路線を歩んだが、フット党首の下、1983年総選挙では、労働党は戦後最低のシェアと大敗を喫した。その時のマニフェストにはコービン氏の10点計画と同じ、国営化や核軍縮が含まれ、当時、労働党の中道派議員は「有史上、最長の遺書」と痛烈に皮肉った^(注10)。その後、労働党は中道左派に路線を再度切り替え、1994年にはトニー・ブレア党首の下で中道にまで軌道修正した。ブレア党首は、新しい労働党を「New Labour」とブランディングし、労働党の伝統的な価値基準から離れ、資本主義を促進した。New Labourは1997年から2010年までの13年



間、国民からの支持を受けて政権を運営した。

2007年からの3年間は、ゴードン・ブラウン首相が政権運営を行ったが、2010年の総選挙で労働党は敗れ、New Labourの時代は終わった^(注11)。同年の党首選挙ではエド・ミリバンド氏が選出され、党の政策方針は、大型企業よりも一般労働者を、資本主義よりも社会主義を促進する左傾姿勢に戻った^(注12)。この結果、2015年の総選挙の争点は、スコットランド国民党（SNP）の大躍進、イギリス独立党の台頭という要素はあったものの、労働党対保守党の対決の構図で見れば、1979年のような左派對右派の競争という簡単な図式となり、英国民は1979年のように右派を選択したのであった。

歴史を見ると、労働党が保守党に勝つためには、ブレア党首のように資本主義を促進する中道路線で戦うのが適当と考えられるが、コービン氏の就任は、労働党をミリバンド時代よりさらに左傾化した。強硬左派の姿勢で保守党に勝利するのは、難しいと考えるのが適当であろうし、実際、多くの評論家の間では、保守党政権が今後10年間は継続すると予想する声が強まっている^{(注13) (注14) (注15)}。

■ 5. 分裂した野党

更に、今回、労働党が更なる左傾化を選択したことで、近い将来、党は2つに分裂すると予想する者も多い^(注16)。党内は、既に中道派と左派が対立している。また、コービン

党首の政策が前例の無いほど左寄りなものであるため、中道派には受け入れがたいものとなっている。

中道派は、「陰の内閣」の閣僚であるチュカ・ウムナ氏とトリスタム・ハント氏が9月8日、中道左派と中道派の労働党議員を集めて、党の将来を議論する「Labour for the Common Good」という会議を開催した^(注17)。ウムナ氏は、支持者がもともと多く、今回の党首選では当初出馬を発表したが、メディアの強い注目を理由に出馬を取り止めた。このウムナ氏は、コービン氏の党首就任が正式に発表された直後、他9人とともに「陰の内閣」の役職を辞任し、この一斉辞任の扇動者は、実力者であるウムナ氏とみられ、再度注目を集め始めている。

現在の路線に賛同できない労働党議員には、党の分裂の他に、総選挙で第3党から第4党に勢力を縮小させた自由民主党に入るという選択肢もある。これから、コービン氏が率いる労働党は、党内の規律を厳格化することは間違いなく、そうなれば、国会の決議場において、党の方針に背く議員、そして離党する議員も出てくるようになるだろう。

一方のコービン党首だが、党内対立、分裂の危機という問題を抱えながらも、56議席を持つスコットランド国民党（SNP）と協力することで、保守党に対抗していく可能性を模索していると言われている。特に、来年、決議が予定されているTridentの見直しや、シリアなどで勢力を拡大させているイスラム国



(ISIL) に対する攻撃に関しては、政府案に強硬に反対すると見られている^(注18)。それでも、評論家の多くは、統制の効いていない最大野党は保守党の効果的な対立軸にはなれないだろうと冷ややかである。

このように労働党は、強硬左派のコービン氏の党首就任で党内が大きく揺れている。コービン氏には、党首となった以上党を取り纏める責任があり、異端児のままではその責任は果たせないだろう。今後、強いリーダーシップを発揮で無い場合、労働党の制度上、就任後1年間が経過すれば、コービン氏に不信任投票を仕掛けることができ^(注19)、その場合、労働党は更なる混乱状態になるであろう。

コービン氏の先行きは、不安材料に満ち溢れ、難しい党運営の舵取りが求められている。その予測をすることは、これまで見てきたとおり難しいものであるが、現時点で言えるただ一つのは、コービン氏の党首就任そのものが英国政治史に残る出来事だということである。

(注1) <http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-33976474>

(注2) <http://www.economist.com/blogs/economist-explains/2015/09/economist-explains-6>

(注3) <https://twitter.com/labourpress/status/631509831103434752>

(注4) <http://www.ft.com/cms/s/0/b2bb9ada-459f-11e5-af2f-4d6e0e5eda22.html#axzz3lFuE53c>

(注5) <http://www.telegraph.co.uk/news/politics/labour/11860439/Labour-leadership-election-How-the-party-voted.html>

(注6) <http://www.telegraph.co.uk/news/politics/labour/11787955/Jeremy-Corbyn-refuses-to-condemn-IRA-for-terrorist-atrocities.html>

labour/11787955/Jeremy-Corbyn-refuses-to-condemn-IRA-for-terrorist-atrocities.html

(注7) <http://www.jeremyforlabour.com/jeremy-corbyn-launches-standing-to-deliver>

(注8) https://d25d2506sfb94s.cloudfront.net/cumulus_uploads/document/oqslggwc4a/YG-Archive-Pol-Sunday-Times-results-110415.pdf#page=15

(注9) <http://www.theguardian.com/politics/2015/aug/04/anti-austerity-voters-poll-jeremy-corbyn-labour>

(注10) <http://www.telegraph.co.uk/news/politics/7362487/Michael-Foot-Labours-1983-general-election-manifesto-and-the-longest-suicide-in-history.html>

(注11) <http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-10518842>

(注12) <http://www.channel4.com/news/tony-blair-ed-miliband-labour-leader-general-election-2015>

(注13) <http://www.independent.co.uk/news/uk/politics/jeremy-corbyn-would-reduce-labours-chances-of-winning-the-next-election-poll-reveals-10457458.html>

(注14) <http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-33619645>

(注15) <http://www.ft.com/cms/s/0/85d51748-4a41-11e5-9b5d-89a026fda5c9.html#axzz3l8YyYV6Y>

(注16) <http://www.ft.com/cms/s/0/db5a37ae-4aa8-11e5-b558-8a9722977189.html#axzz3k7Cyz9Ao>

(注17) <http://www.standard.co.uk/news/politics/shadow-cabinet-mps-form-the-resistance-group-in-anticipation-of-corbyn-win-a2633476.html>

(注18) <http://www.ft.com/cms/s/0/d6c9a8a0-5318-11e5-8642-453585f2cfd.html#axzz3l8YyYV6Y>

(注19) <http://www.economist.com/blogs/economist-explains/2015/09/economist-explains-6>

